

# Press Book vol.2

2001- up dated sep. 2007

kazuyo komoda design

LA RIVISTA DELL'ARREDAMENTO N° 513 LUGLIO/AGOSTO 2001

# INTERNI

C.P. 20000000000000000000

DUE CULTURE A CONFRONTO  
CULTURAL INTERFACE

IL PAESAGGIO E LA CITTÀ  
LANDSCAPE AND CITY

L'ARCHITETTURA E IL DESIGN  
ARCHITECTURE AND DESIGN

TOSHIYUKI KITA: UN DESIGNER  
TRA DUE MONDI/DESIGNING  
BETWEEN TWO WORLDS

&

## MILANO-TOKYO/TOKYO-MILANO



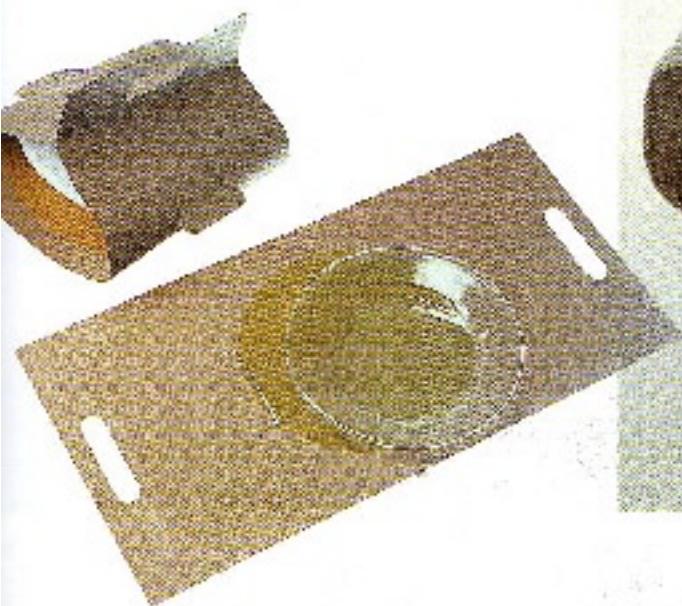
10513

9 771122 365001

**Kazuyo Komoda.** Venne dal Giappone, imparare l'italiano, parlare solamente questo. A i Medesigai Disegnava anche a mano, passandole sul segno la grida: questa è Kazuyo Komoda, nata a Tokio nel 1961. Iscritta in design alla locale Università delle Belle Arti, giunta nel 1989 a Milano e qui ilma. Del suo lavoro e della sua vita dice: "Io amo il design italiano, le sue tipologie e le sue invenzioni. Io amo il design perché più presente nella vita quotidiana di quanto non lo sia in Giappone. La fantasia qui trova spazio ed aziende disposte a credervi. Io cerco di fare cose nuove, partire da zero, non solo formalmente ma anche dal punto di vista sentimentale e psicologico". E di immaginare come se la veste insonnante per sette anni nello studio di Denis Santachiara prima di disegnare in propria per aziende leader quali Driade, Bernini, Dombrach. Sensibilità, psiche, sorpresa e femminilità sono le sue doti, come nel dritto Verso con braccioli ribaltabili per DNA, nella tavola per le gincane i bambini, apposta alle madri Babyloom, o nel servizio take-away Komodo per Pandor.

Torna in Giappone, e militare, con i suoi fratelli e sorelle. Tutto a disegni, tutto, respiro leggero in design. E a Tokyo fonda la sua studio in 1991, che si dedica al design di casa. Si trasferisce a Milano nel 1995 ed apre "Che s'è fatto", la sua casa di design a via Verri 10.

"Istebel design ha spiccato molti momenti. In tutti designa molti anni pensa in everyday. In tutti designa elementi che magari non avrai mai visto prima. L'oggetto oggi lo senti fuori moda, ma in trenta anni fa, era un oggetto di tendenza, di design, di design psicologico. Istituto" Sia nei saloni di design che in esposizioni hanno preso parte a centinaia di mostre, da "L'arte del design" a "DNA", da "Le donne del design" a "Casa e design" a "Babyloom" e nel servizio take-away Komodo per Pandor.



# VOGUE

NIPPON

5

MAY  
2001  
No. 21  
780yen

ヴォーグ ニッポン

Cover Star  
デヴォン・アオ

Pop Special

パリもミラノもニューヨークも

東京ポップ

が気になる

ブッチからヴィンテージまで  
究極のマニア・スタイル

キャットウォークのモデルたちも  
今シーズンは“白肌美人”！

Milan Guide (別冊付録)

カルラ・ソツツァーニ、ヴェロニカ・エトロ、ドナテッラ・ウェルサーチ、G.F.フェレ、カルラ・フェンディ etc

「私のミラノ」教えます。



# pen

with New Attitude

5/15  
2002 No.83  
500  
yen



もう始まっている。  
21世紀、デザインは、



アメリカ文学は、いま。  
9・11が与えた衝撃を探る



**植田和世**  
KAZUYO KOMOBA  
1951年東京生まれ。1978年にイタリアへ。当時もともと第一線で活動する、ミラノの「ス・サンチャニア」のスタジオでの勤務を経て、その後独立。伊藤洋介、清水一文、今井みのるなどをプロジェクトを担当。最近は、小物の内装や空間デザインの仕事が多い。



# 未来だけを考えたアイデアは、 すぐに古びてしまう。

ヨーロッパのデザイナー活動のキャリアが、日本でのキャリアを手本に纏めたデビューパーク。それが植田和世だ。

「20世紀最後」、スタイリングし選んだものは確実に古くなる彼女は、いつも心事がリラックスで満ち、心地よいデザインを追求している。

シンプルな形状、ヘンベとして多様に活躍する「ウーリン」。販売代理店: ハンドメイド・カワセル。¥20,000/ <http://www.handsel.com> 03-3400-6424

彼女のデザインを見たイタリア人は、「アーティストで勉強を終った後、アートの店舗、Rum-Serviceでアートと生きる」という。身をもってアートで人生を充実させたいと、身をもってアートで人生を充実させたいといつても、誰かあるデザインをつくらり上げる。

そんな感性が、國吉子流たの感性のするスタイルのバスルームに、木の感覚を生かしたタオル掛けをデザインした

恐怖心を取り除くため、  
トンネルをデザインしたい。

20世紀のデザイナーは、ヨーロッパ、北アフリカ、南米、アフリカなど、世界的かつ汎用性や適用性に欠けていたのは、資源的に、20世紀は、人がより人間的生きるために精神的エネルギーを得るために、多くのエネルギーが必要だったためのデザイナーが切望していたのは、資源の有効利用が求められてきた。

これが彼女の見方だ。ソフマップ、カウチに座り、ベッドにも使用可能な「ガーリン」はそんなモードのを誕生した。本来だけを越えてデザインをするくわびにしません。机は、机を創造するというのが彼女の信念だ。だから、もう自分が自分でなく、贈り主となるためのデザイナー、または多様化していくスタイルの企画者十才ナルなものを使案していく。これが、彼女のところの21世紀をデザインなのだ。

一方でヨーロッパで今、大騒ぎの資本化した変わった空間感フロータクトのデザインで引き取られたこの子、ファンタジーノ・ヴァンブルのよう。より個性的で、いろんなスタイルを握った子ヤイナーが出てきる活躍することになる期待している。

そんな彼女が、これから取り組むことのもう分けは、なかなかユニークな。それは、今までデザイナーハンセンのひとつものや、モノ個人間の精神面をデザイナーハンセンのひと口に彼女なし得かないが、誰が生産感を抱いてしまうトーンをもつての、口に彼女なりのデザインを進めていくので、わかるするものには姿勢をもつて、というのは、その一端にすぎない。大人しいのか、小悪魔なのか、この外に何様つかみこころのない彼女の個性が、われわれこれをこれからどうがけてくれるのか興味深い。



トントンと叩いてでも音が鳴るバスク。上部に木の柄で開閉が取れ、木製ヒール部分のランナー付き。価格未定/タグ・ホルツ/新宿店/東京店



バスクの骨董型。ハサウエーブーンを用ひ込んだガラス入り。使用して残る吹きの音が大きな魅力。¥7,000/タグ・ホルツ/新宿店/東京店



二重底で軽く有名なアントワネット・ラーフの「ジサイレ・リサイケ」の複数の大きさの車椅子。¥33,000/アントワネット・ラーフ/タグ・ホルツ/新宿店/東京店



バブル・ム用にデザインされたシン・フルーツ容器がある小さめの「テルセラ」。丸い脚があり、フルーツや他の小物を収容するのに便利。¥38,000/タグ・ホルツ/新宿店/東京店

CONFORT [コンフォルト] 8月増刊

世界に発信・日本の椅子とデザイナー

# ジャパンーズ チェア

世界に発信・日本の椅子とデザイナー



*Chairs*

エーランチ ☐

## Kazuyoshi Komoda

内装・インテリア  
空間アート

デザイナー以外の私が  
デザインを歩く意識している

私は、ヨーロッパで長い年月の中でデザイン  
の傳統を学びたうえで、違う文化でもある日本  
に帰ってきて、インテリアや、インテリアアートの  
面白さを、多くの人に見てもらいたい。それが、この  
アート、スタイルを世界へ運ぶのが、自分なり  
の使命だと。日本アートデザインセンターを主催す  
り、アートアカデミーの講師をしてもらったり、書籍  
出したりするなどして、自分の心地かなく、  
自分たちデザイナーのみならず、こういうことを  
やって、インテリアショップなど内装販売会社で働  
くこと以前から、日本全国、内装アートの普及に大口出しで  
と取り組んでる。なぜかは、この空虚感が、中  
國は半島で古来持つ文化が、この時代で失われてしま  
おもひうが、それが何よりも心配しているので、アーティ  
ストとしての活動も頑張っている。アーティストのアーティ  
スティック、プロのアーティストデザインでも、日本ではい  
ふては珍しい少しだけ古風なアーティストをして、普通  
に営業受け入れないむけに、自分で宣伝を自分で行  
ってもあればいいとおもいます。

それによく聞く「アーティストの在上  
のアーティスト」や「アーティストのアーティ  
スト」とかの言葉で、思案がちんでいたが、そ  
れ以上が必ず前者がいいと思ってるうえで、イ  
ンタビュー担当は最初から「小説家もうちは、  
おもしろい人です」とか「おもしろい作家の中にも



『新規に作成したアート』(2002年)



『アートディレクターとしての活動』(2002年)

ものすごく意識している。同じ物で同じものが  
世界中に、一般的な知識があると重ねた方がいいと  
感じて、それを自分で出すているからなの。だから  
私も、ちゃんと自分で出したいところが、アーティ  
ストとしての自己表現だね。私は、自分で手で  
つくして、自分で見れる。

イケメンアーティスト時代は新しい自分が浮かんでいた。



左:『アート作品』(2002年)  
右:『アートアカデミー』(2002年)



Environ Biol Fish (2004) 71:271–279  
DOI 10.1023/B:EBF1.0000033200.00000

トヨタ一ツ橋店にいるお兄さんであります。

「アリイナ」の御元の御子が人間で、これがお方だ  
アリアミとして御見つけてお、御用を承り

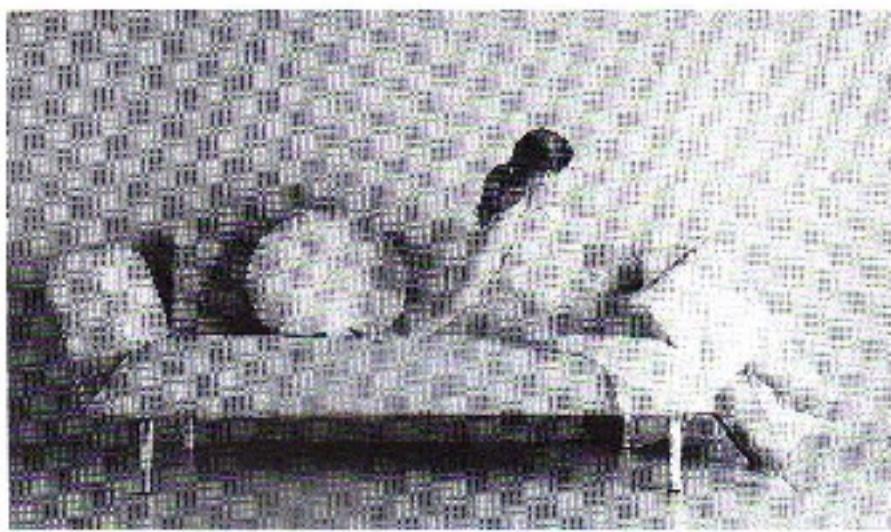


Photo: ©Kōki Ito/Photo: ©Kōki Ito/Photo: ©Kōki Ito

まず文化政策としての側面や街並みがどのように育つのか、要は人の心が近くと感じるんだですね。今から昔の国として良べく育てるだけのものですね。そういうところがみんな育てているから、職人さんがいたとき経済も活性化するのに余裕があるんですね。でも、これがまたまた問題になってくるんです。口説きと覺えますよね。でもいい人が方がデザインにこだわって働くよと何處か二ヵ所をすると、自分で生根していこうなどうことを重視した時代のアーティストについてなんでもないことを言っています。だからそれがいいんではないんですね。それについて、アサイアスが例の人たちのデザインで見る限りが日本とは全然違う。だからこそイタリアンの元祖は、アーティストのコレクションをオーブンしている感じです。

#### どうせ行くなら とんでもなく面白いデザイナーのもとへ

【長谷川アーティストに取材】とにかく日本の心とこれで遊んでみよう、日本人という字を出てやる。

と見えたからですね。大学を卒業後就職の機会に入り、そこで世界が広がり开阔地でのことの重要性を知り、と感じました。特にそれは日本を代表する開拓者ではなく、自分の周りに有志を成るプロジェクトにま、それが世界のインスピレーションデザイナーが関わっている。これはやっぱりインスピレーションが豊富ないと云々といふだけないと思えた、マ・ニードリーラインスシグナに参りその後に4年間いました。当時日本ではまだ、特に青葉がなくて、長い年の人たちはほとんどお互いに泊めていましたし、私も最初は少し心配しながらソロキャンプに山へいったら二ツペに会ったくなりますように思って前半を始めたんですけど、それ以後は毎日と云われる大変に歩き歩きで、それがまた、それは日本の未発達な、まだまだ原始的で未開拓で示す所で、それでアーティストへ行こうと決めた。

【マイアリスのアーティスト】全國が天下にあるかのようと書かれていたり、そして十箇所に分かれていますアーティスト、アーティストがいるアーティスト

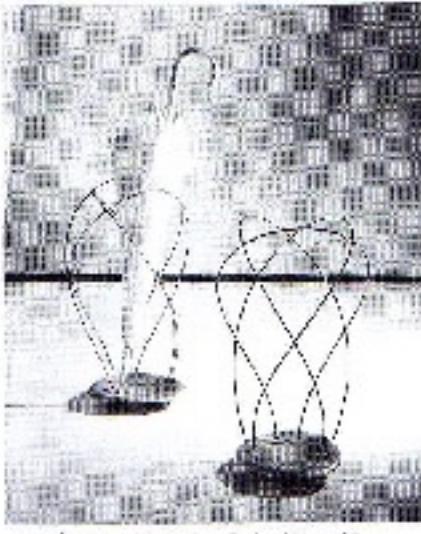


Photo: ©Kōki Ito/Photo: ©Kōki Ito/Photo: ©Kōki Ito

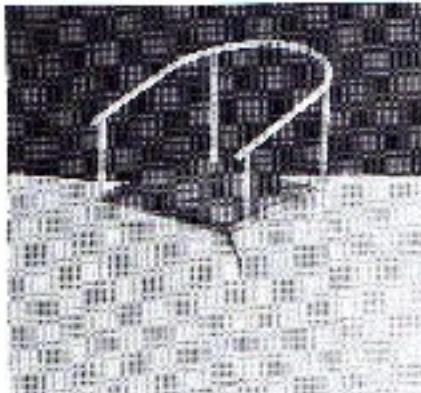
人ってどうないなと感つたときに「うそでしょ」と思つてから、若くから、若くして、変わつた仕事をしてきて、日本を出てから、マイケルで元気いふくらのマイナー、洋服はついている中古のデザイナードレスが、これがいいと、それで、買って戻された方がリントニアのところもいました。日本くらいならまだこれだけ」というお話をしましたが、やんで、すごくフツーだったと感します。ノターンで洋服の販売をはじめ、いろいろな事に取りかかれて、「ああ、アサインされてるのに新しいものだから」とか曰くなくて、アサインはねえよ、うれしい方で買はる所にフィンクスして、あとは徐々に自分の仕事を増えて、そしてソニーになつた仕事をしてしまつたときは、もうソニーで仕事をするのを考えるのって、とても口に出さず、楽しく仕事をするということを覚えたのが、センターフィルアーティストになりましたと書きましたと書いています。

アザイシって極度の鮮速筆を見出すことを

うるさいとか大騒ぎをするのが好きなんですが、毎回同じことかいふーが空から下にくるといふ状態でいるふみふみのコノボーネーションがもううれしいのですし、アラウンド中に多少交更地帯があり、コスト心配でこういう型式にしてしまってはつまらないと、そういう形で設計しておられました。でもそれがやっと決まりでござるといつておると、ある意味での運営がせきをすいのかもしれません。カーブボーカルラインは想定するとして、ひとつはつづけられたものを持っていくべきかといふ一つある。ここを走らせていくのではなくて、50度えたつのS字型を出していくのかさうゆうのです。それがこれまでよく走らせていくつもある。製造いデザインだったむしろ走らせていくのがつづけてよくと、もがく見たらもうひびきの方がいいと見つたからそっちを走らせるのが目的です。でも先方いう見方をうながされながら、デザインの方が結構がん



アーティスト: 2005年 1月7日 小・ス・パンク ライブ



Volume 12 Number 2

アーティスト、ジョン・シナトラが、この曲を歌ったのが1950年代初頭。ヨーロッパでは、日本で歌う日本人歌手として、彼の歌が最も人気があった。日本でも、彼の歌は、多くの人に親しまれてきた。その後、多くのアーティストが、この曲をカバーして歌っている。日本でも、多くのアーティストが、この曲をカバーして歌っている。

**ATTUALITÀ**

Sheriff Dodi Gheddafi

Le signore dell'arte

Andree Putman. Nove anni

**SHOPPING CENTER**

Il moderno in veste etno

Una casa tutta in blu

Idee per una cucina-living

**CASA  
MICA**

**donne&décor**  
il tempo ritrovato



# kazuyo komoda

poesia del quotidiano

Tanto bianco e arredi essenziali. Siamo nella casa-studio di Kazuyo Komoda, designer di Tokyo ma milanese d'adozione ormai da anni (nel ritratto, seduta su "Aluminium Chair" degli Eames). Nel grande ambiente che è un po' il cuore dell'abitazione (sopra), vita e lavoro si mescolano attorno a un grande tavolo disegnato dalla padrona di casa. Sullo sfondo delle porte-armadio di alluminio che riflette e amplifica la luce (anch'esse ideata da Komoda), un riferimento alla natura: due tubi del riscaldamento che la designer ha rivestito di rafia, trasformandoli in uno slanciato bambù da appoggio.

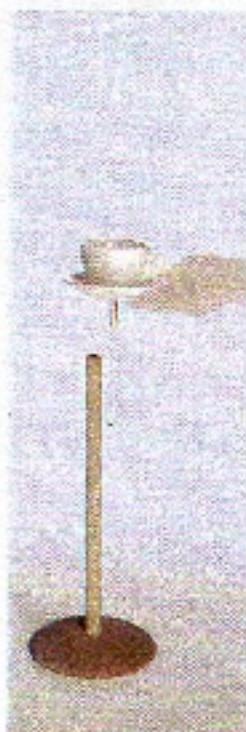


A lato, una delle pareti della casa-studio, dove Kazuyo Komoda ha disegnato ciò che ancora non c'è (un divano) o che non ci può essere (una sedia). Un oscuramento per dilatare lo spazio lasciandolo materialmente vuoto, ma anche un fondale che può cambiare a seconda dell'umore o della stagione. In primo piano, vaso con portacandele disegnati da Komoda ("Asemi", prodotto da Progetti). Sotto: "Tavolino da tè", un supporto per tazze solitarie disegnato da Komoda per Virtualdesign.com.

CASAMODA  
90  
NOVEMBRE 2003



## poesia del quotidiano



Uno spazio impregnato di luce e di bianco assoluto, due stanze a poco più. In un immobile milanese degli anni 30. È l'abitazione-atelier di Kazuyo Komoda, designer giapponese quarantenne, sbarcata a Milano nel 1989 e ora attualmente progettista (i suoi pezzi sono prodotti da aziende come Bernini, Driade, Progetti, Mugu, Lumen Center). Lungi dall'essere minimalista, nel suo candore essenziale, la casa-studio di Komoda è abitato dalla presenza forte e delicata di arredi e suppellettili disegnati da lei stessa. Una famiglia di oggetti domestici arricchevoli e poetici. Alla funzione principale di un oggetto, infatti, Komoda sa sempre sovrapporre e associare qualità sensuali, tattili, emotive. E in qualche modo tutti i suoi progetti finiscono per avere la semplicità intatta dell'infanzia, articolata però da un segno o da un rimando colto. Così una lampada da comodino diventa un libro magico che si spegne chiudendosi, un portacandele è un insieme di steli metallici da comporre come fiori (in un

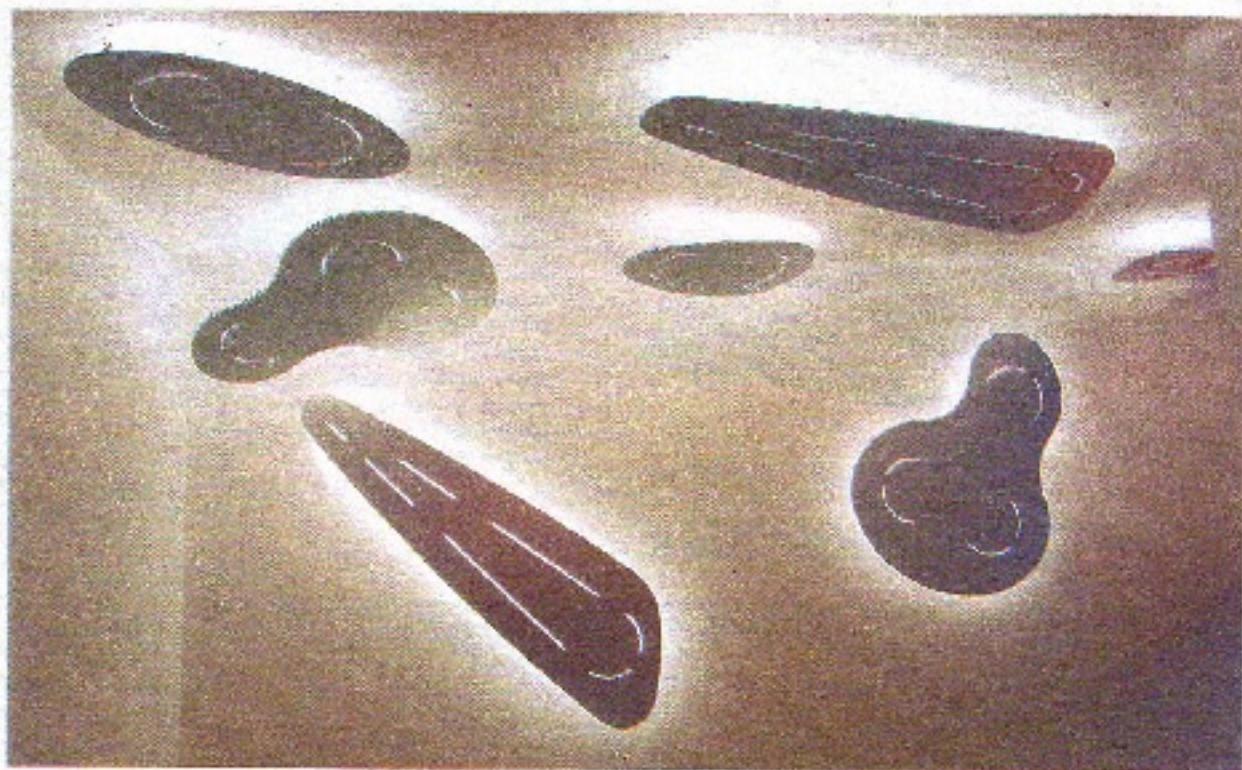
simbolico Ikabana) nel vaso bianco di casa, un divano imbottito di un materiale impalpabile ha il profilo ondulato di una nuvola su cui sedersi. Un certo spirito ludico e ironico, un modo di progettare quasi artigianale basato sulla costruzione di piccoli modellini e di prototipi auto-prodotti rivelano un'affinità con quello che la designer indica senza tentennamenti come il suo maestro ideale: Achille Castiglioni. Ma Komoda in realtà si è formata alla scuola di Belle Arti di Tokyo, e la sua poetica è intimamente giapponese. Così, mescolando influenze e cultura del Sol Levante con riferimenti formali e un modo di lavorare appreso in Italia, la designer ha inventato un suo linguaggio caratteristico, capace di conferire ritualità al gesto quotidiano. Aria, fuoco, luce, acqua, sono per lei elementi fondamentali quanto il legno, il metallo, il vetro che compongono i suoi oggetti. E qui che il design sfiora la poesia. E le cose di Kazuyo Komoda parlano a chi sa vedere e ascoltare oltre la forma, e la funzione.



A sinistra, il "Libro da Comodino", un prototipo di lampada (mai prodotto) in cui la luce si spegne magicamente chiudendo il volume (presentato alla mostra Japanese Light, 1993). A destra, ritratti di Kazuyo Komoda nella sua casa-atelier. Sotto, un particolare del salone. Il tavolo è un progetto di Komoda, come la sedia in ferro verniciato bianco e palissandro. Il cui sedile dondola perché è sostenuto da cavetti d'acciaio (si chiama "Altalena" e per ora è solo un prototipo).

## poesia del quotidiano

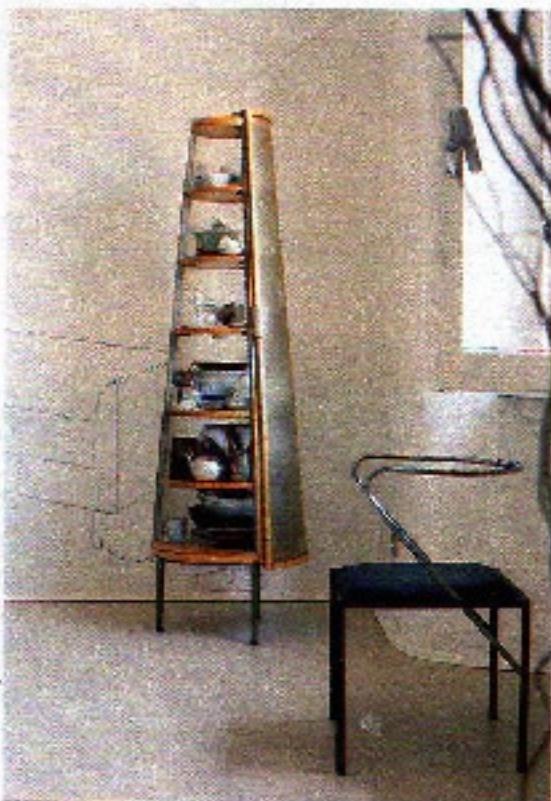




CASAMICA  
94  
NOVEMBRE 2003

## poesia del quotidiano

Sopra, le lampade fluorescenti "Kumo" presentate a Euroluce 2003 e prodotte da Lumen Center Italia: sono sottili lastrine d'alluminio dialeggiate dalla parete. A destra, la credenza-totem disegnata per Bonini (faggio multistrato, alluminio e un sottile foglio di policarbonato): si restringe a cono, per contenere i diversi formati di piatti e bicchieri. Sotto, il portarrotoli "Photogenia" di Matteograssi: è fatto con un semplice faglio di pvc ripiegato. Ha una linea fluida e un'imbottitura morbidiissima. Il sofà della "Komoda Collection Living" di Mogu (a sinistra), presentato al Salone del Mobile 2003.



ARREDAMENTO - COUNTRY LIVING - IMMOBILIARE

2

ARREDAMENTO  
COUNTRY  
IMMOBILIARE  
VILLAS & CASA  
LIVING  
EDIFICI  
CASE  
INTERIOR  
DESIGN  
ARREDAMENTO  
COUNTRY  
IMMOBILIARE

LA PRIMA  
RIVISTA  
MENSILE  
PER COMPRARE,  
ARREDARE,  
E VIVERE  
LA CASA  
DI PRESTIGIO

# VILLAS & CASA

## COME ARREDARE LA NOTTE

Restauro

IL CASALE MARIANI  
A MONTALCINO

Interior  
L'ARTE DI VIVERE  
IN UNA GROTTA



AFFARI  
DIMORE CHIC A VENEZIA E CHALET A VAL D'ISERE

9 771121847003

# filo diretto

di FRANCESCA PIERPAOLI

## DELICATE CREAZIONI EMOTIVE

**K**azuyo Komoda, designer nato a Tokyo e dal 1989 attivo in Italia, ha un approccio



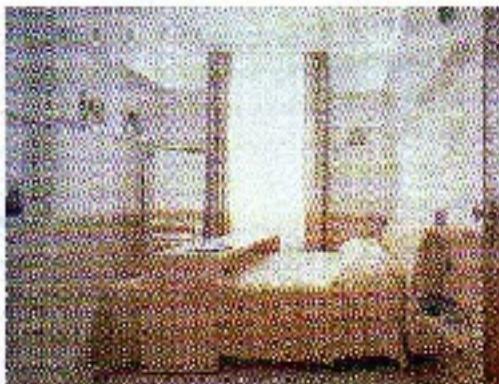
*Sotto, da sinistra:*  
Kazuyo Komoda, una sedia  
dell'hotel Belvedere a  
Montecatini, da lui arredato.

da origine a una soluzione  
leggera, per la sciarpa o per  
gli occhi. "Il designer",  
sostiene Kazuyo, "è un

complotto di design:  
risolverlo riunendo tutti  
d'accordo". Tutti i lavori di  
Komoda sono caratterizzati  
da una sensazione tactica,  
"che cerca intimità tra oggetti  
e persone", e da un  
apprezzamento chiaro ed  
innovativo nello stesso  
tempo: linee pulite e  
morbide, scandite da  
continua ricerca che  
Komoda fa sui materiali.  
"Mi piace partire da zero",  
dichiara, "partire da cosa  
fare, e creare piccole

delicata ed essenziale al  
progetto. "Nel mio lavoro di  
progettista", dichiara,  
"quello che mi interessa è  
poter lavorare sul lato  
immateriale e ed emotivo dei  
prodotti. Vorrei che essi  
lasciassero una traccia  
profonda nella vita delle  
persone che li utilizzano".  
Komoda, dopo un'esperienza  
professionale nello studio di

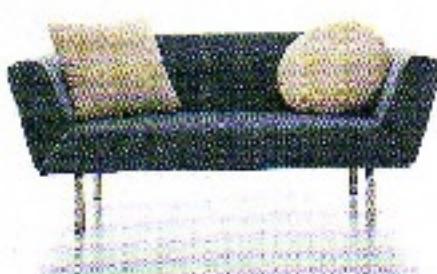
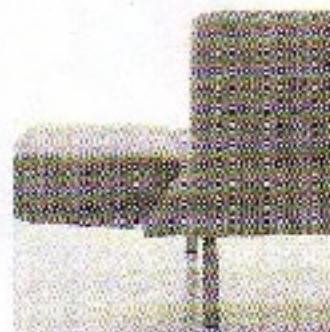
Denis Santachiara, avvia il  
proprio studio di  
progettazione e lavora su  
fronti diversi, dall'interior  
design all'iluminazione, alle  
mostre, tutti accomunati da  
un apprezzato gioco e lieve.  
Ne, progetto del divano  
Amazzone per DNA, ad  
esempio, al posto di uno  
schienale ingombrante, un  
lavoro di chiazze intrecciate



*Sopra, a destra,*  
*divano Amazzone per DNA.*  
*A sinistra, rispettivamente*  
*flexibile e colorata per Maga.*

risoluzione di problemi. I  
progetti sono vincolati da  
esigenze diverse: marketing,  
estetica, produzione, è

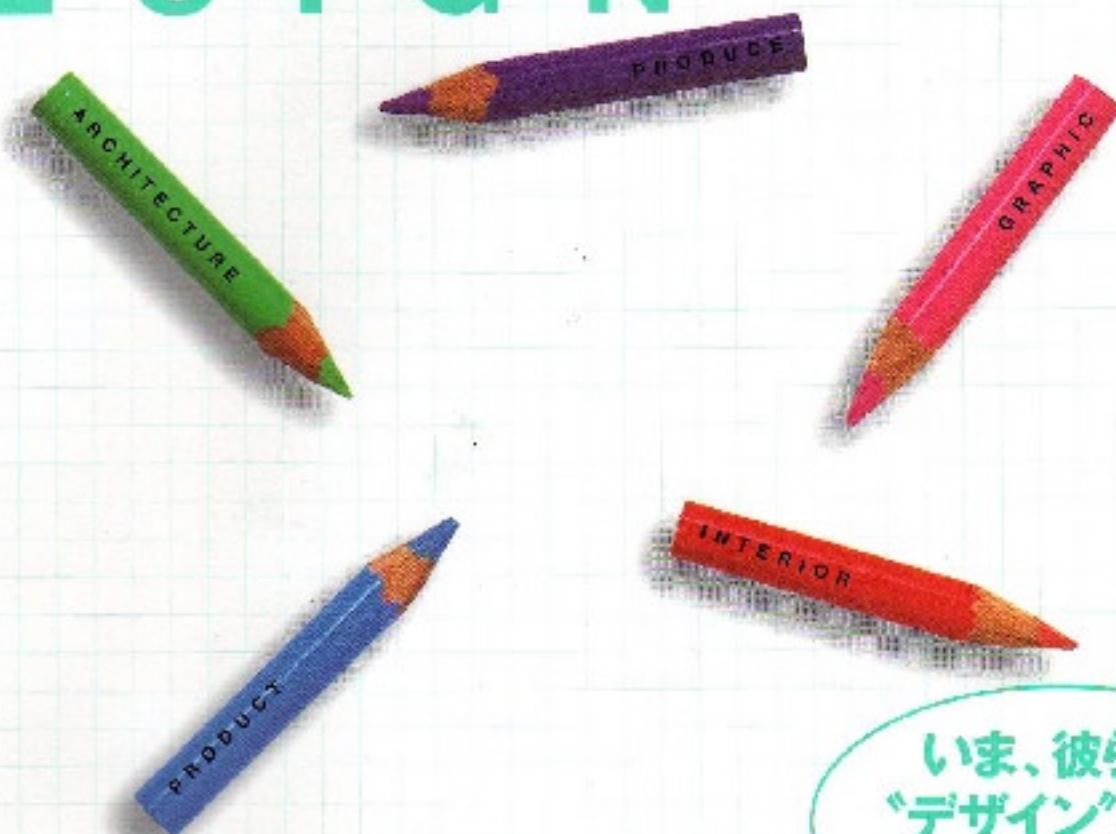
inventori. Non mi piace,  
invece, il restyling di pezzi  
già esistenti, modificare  
qualcosa di classico".



*A sinistra,*  
*a destra*  
*Fox,*  
*per DNA,*  
*con cuscini*  
*abbiggiando*  
*un*  
*bracciolo,*  
*diverso*  
*ora leva.*

アエラムック  
2005

# AERA DESIGN



いま、彼らの  
“デザイン”から  
目が離せない！

# ニッポンの デザイナー 100人

建築、プロダクト、グラフィックから  
インテリア、プロデュースまで  
世界の勢い注目を集める  
「ニッポンデザイン」のすべて  
桐山登士樹+関康子+西山浩平=編

# 菰田和世

解放感あふれる伸びやかな表現方法  
ときに激しく、ときに繊細に、  
空気の流れをかたちに変えるデザイナー



Filo di seta 吉山店／ワールド／2003  
カクシブルーブランドの  
ディィッティア。後  
ろから椅子「ラルス」  
いす、商品「ウッドウッド」  
など。設計された。

Photo by Natascha & Philippe



La Foresta dell'Acqua (水のかたち)／イタリア・モンテカ  
ティニ・テルメ／2000  
因縁2000年を記念したインсталレーションとして行ったイルミ  
ネーションデザイン。結果で有名な庭園地帯の水辺に小さ  
くして、同じ木の形で置いた。Photo by David Zanard



Trinacria / pondora design (イタリア)／2004  
モノクロームの、赤い、オートマチック、丸丸のシチュエーシ  
ョンなどを定めておられたアイチア作品。見た目日々は趣  
味あります。など良いです。



Kokon/Banffia International  
(イタリア)／1990  
ステンレススピールをアル  
ミニマリストに見し活をださ  
せ。日本明子とのの物  
作り方で自然の自然を新しい  
の歴史になる。



Vento / Ettore Sottsass (イタリア)／2000  
吹きのアーム部分が柔らかく、人に多く絡れるよう  
になる。シート部分の縫合もがゆいのアソブーバード  
として生粋可憐。Photo by Nito Zagnoli

昔、六本木に仲間次さん(現東京造形大学教  
授)が主宰していたグ・エーというデザイン  
事務所があった。吉山和世さんのデザイン人生  
はそこからスタートした。その後ミケノに進む、  
今年ついに月日が流れようとしている。ミケ  
ノではデニム・サンタモアラ風に的小じ、機械  
的にアフスして遊び心のあるデザインを学んだ。  
「デザインに楽しい行為である」という其  
本哲学である。私が一番好きなデザインは、  
身立ての「Asian」。このキャストのベースに

差し込まれたスチールワイヤーの有機的な柔  
らかなデザインは、その後の吉田さんのデザイン  
にも見通するテイストだろう。

初期のナワカ&モリーニ社のテーブル(私作)  
から近作のドリアナ社のファットスタンダードする  
まで、吉田さんのデザインはどこか緩しきやう  
く気分をリラックスさせてくれる。吉山がア  
ザインを依頼した、カガミクリスタルの新ブ  
ランド「Benedetto」も、古風的なクリスタル  
に新鮮感を加えた意欲作だ。(吉山)

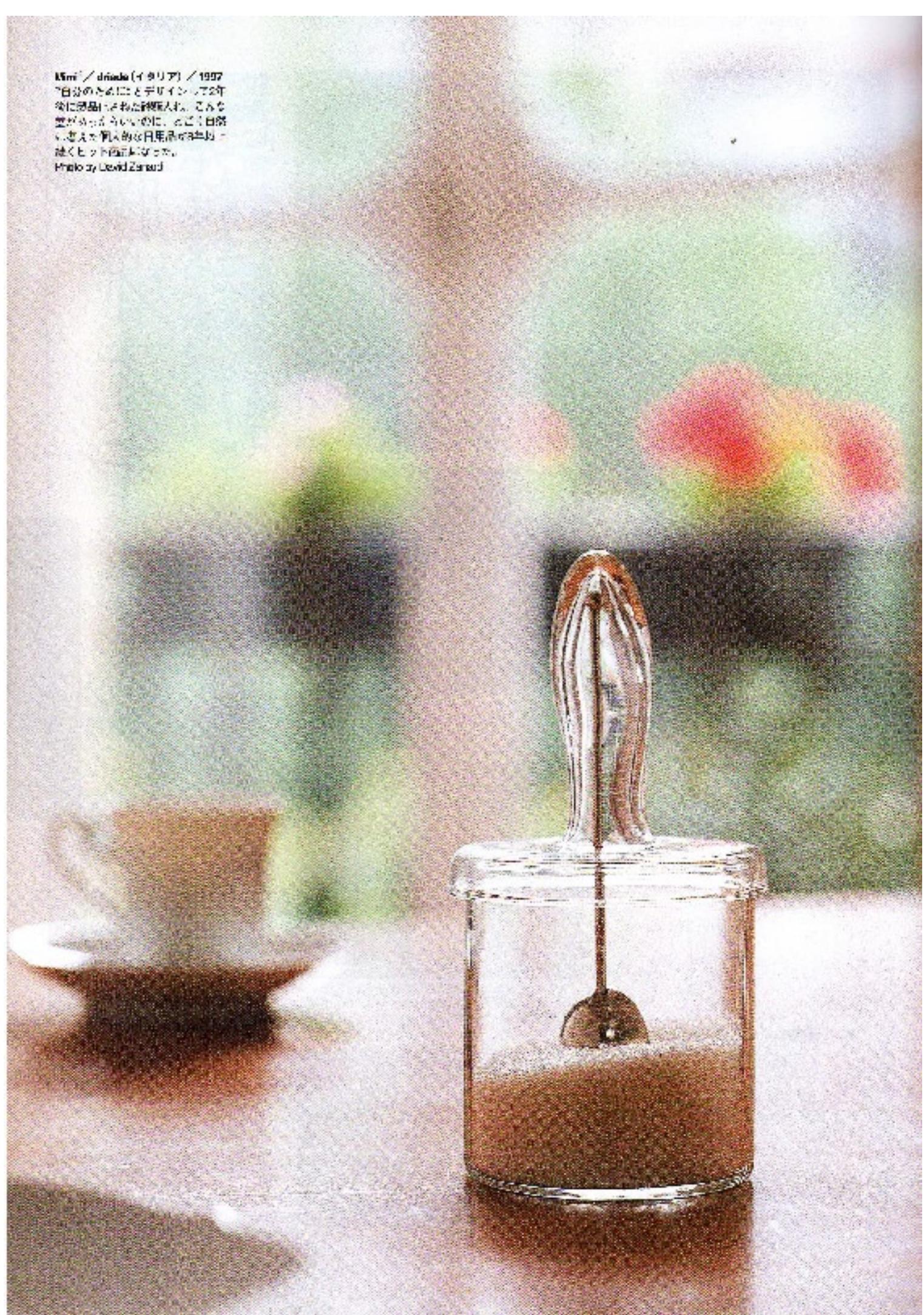


こそね・かずよ  
1961年東京生まれ。筑波大  
学建築科卒業。アトリエト  
・デザイン・コンサルタント、シ  
ン・イズム、ジニアード・デザイン  
スクエアを経て、2000年独立。  
スクエア・サンクタ・アラウンド  
、メリーランドとしてミ  
ラノを拠点に活動。インテ  
リア・デザインや家具、小物  
などのプロダクト・デザイン  
を中心に、ルアーリング、ハ  
ッカーリング、インスタ  
レーションなどで注目され  
る。ドリアナなどヨ  
ーロッパ・メーカーのノ  
ロタクトを手がける。

15ml / d'arco (イタリア) / 1997

"自分のためにことデリインして2年  
後に商品にされた計測入れ。こんな  
豈がうとういのに、とて白熱  
い想入を個人的な日用品で実現し、  
速くヒット商品になつた。

Photo by David Zurek





IDEE PER  
IL PUNTO VENDITA

MACEF/INTERIM  
200\_203\_GERMANIA 24000

La maquette del "desi nemo" realizzato da Kazuyo Komoda per il negozi Macet InOut, al padiglione B/12.  
*Model of the installation by Kazuyo Komoda for the Macet InOut shop at pavilion B/12.*



# Urban Occasion

**Vivere la casa come una città,  
e la città come una casa.**

*Kazuyo Komoda*



Tessitura d'Aria è uno spazio espositivo che diventa una massa d'aria grazie alla sua tessitura. È uno spazio che funziona con pochi elementi. Uno spazio senza pareti, senza soffitto, solo da esposizione, dotato però di una forte atmosfera e di un effetto traslucido percepibile tutto in una volta, senza dovere entrare nei dettagli. È una proposta di allestimento che si propone di valorizzare i prodotti in mostra e di stimolare la curiosità dei visitatori, invitandoli a scoprire le novità una per volta.

*Kazuyo Komoda 佐藤和子*

**A**l primo impatto l'allestimento è omogeneo, sembra quasi un progetto di 'scissione' che si discosta dal tradizionale approccio architettonico, teso a definire lo spazio attraverso gli elementi architettonici - come pareti e soffitti - e i loro mix con elementi simbolici e metafisici.

Nella Tessitura d'Arte non esistono pareti divisorie; la relazione tra gli elementi espositivi e i corridoi è sempre uguale e gli espositori sono costituiti da pochi elementi, cioè da piani disposti a diverse altezze, diversificate secondo la tipologia dei prodotti esposti e secondo la

l'esterno e l'interno sono in stretta relazione tra loro ma il contrario presenta una sottile delimitazione, esprimendo così il senso di un'equilibrata penetrazione tra dimensione pubblica e dimensione privata, tra 'esperienze' in casa e fuori casa, tra lavoro e viaggio. Ho pensato a un ambiente che suggerisse un'idea di protezione, che fosse accogliente ed espansivo: trasparenza, fiducia, semplicità. Il riferimento che ho preso è presto per questo progetto è il concetto del diaframma, cioè della 'griglia' che fa da filtro tra dentro e fuori, tra luce e ombra, tra pubblico e privato,

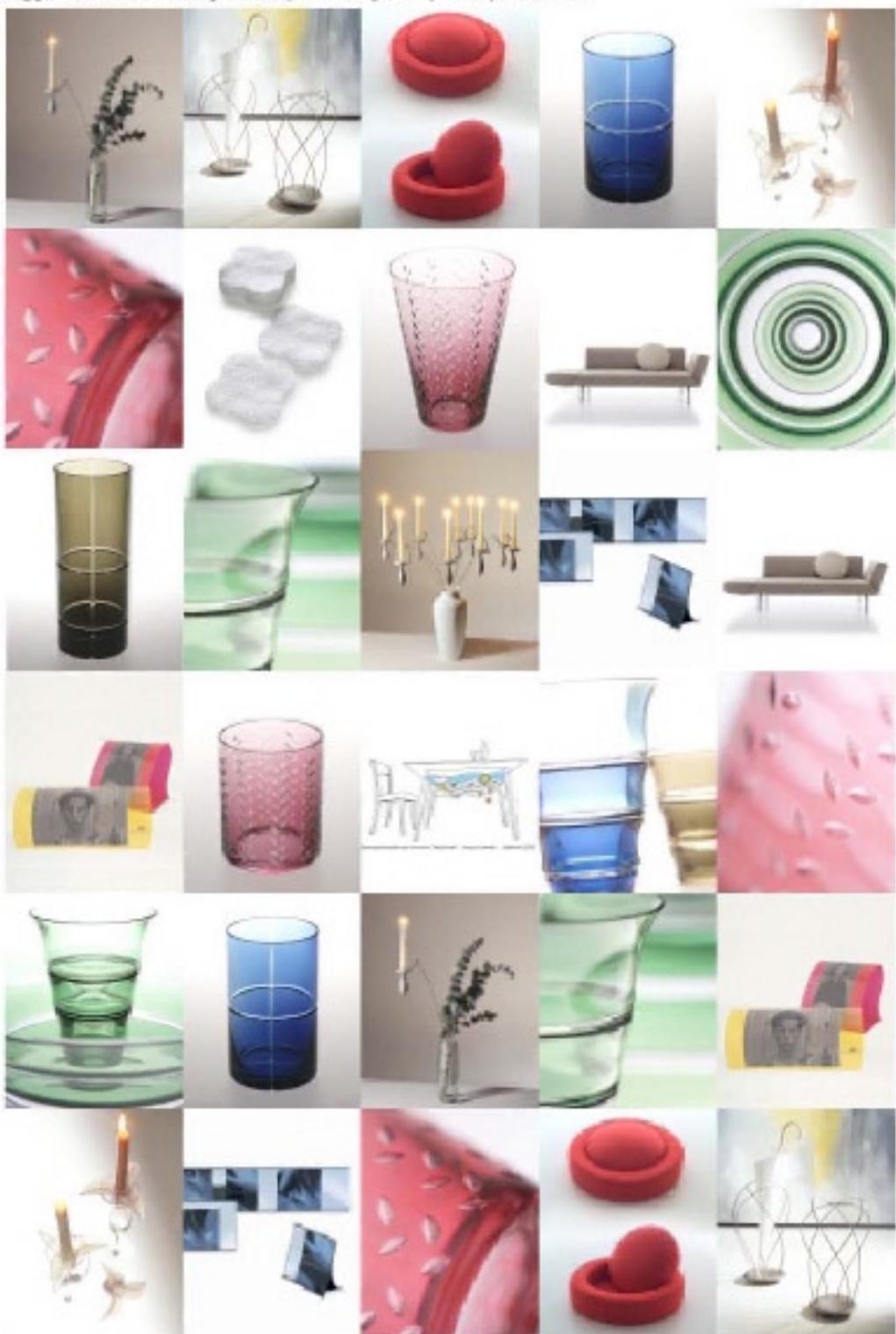


necessità di dare loro risultato, al contrario, di dare un senso di protezione fisica e viviva. I piani sono strutturalmente retti da sottili tubi metallici. Rispetto all'abituale standard espositivo, questi elementi sono molto più lunghi e alti, in modo da coinvolgere l'aria. L'idea - molto semplice - è infatti quella di prolungare la struttura e di definire progressivamente tutto lo spazio, attribuendogli uno spessore e una texture. Per interpretare il tema dato - Urban Occasion: vivere la casa come una città e la città come una casa - ho pensato a uno spazio senza soglia, dove

cioè un'esperienza peculiare della cultura architettonica e abitativa giapponese. Per quanto riguarda il colore, ho scelto il neutro bianco quale 'ideale contenitore' per vari tipi di prodotto, ho poi diviso i prodotti in tre gruppi a seconda delle 'temperature d'immagine': 20 gradi-colori chiari primaverili, metallici, luminosi, eleganti (a parte più importante della tendenza); 28 gradi-colori di equilibrio, intensi ma non troppo eloquenti, sobri con immagine so-ida; 36 gradi-colori naturali, colore cuoio, ecc., ecc. per gli oggetti più tradizionali.  
(Kazuyo Komoda)

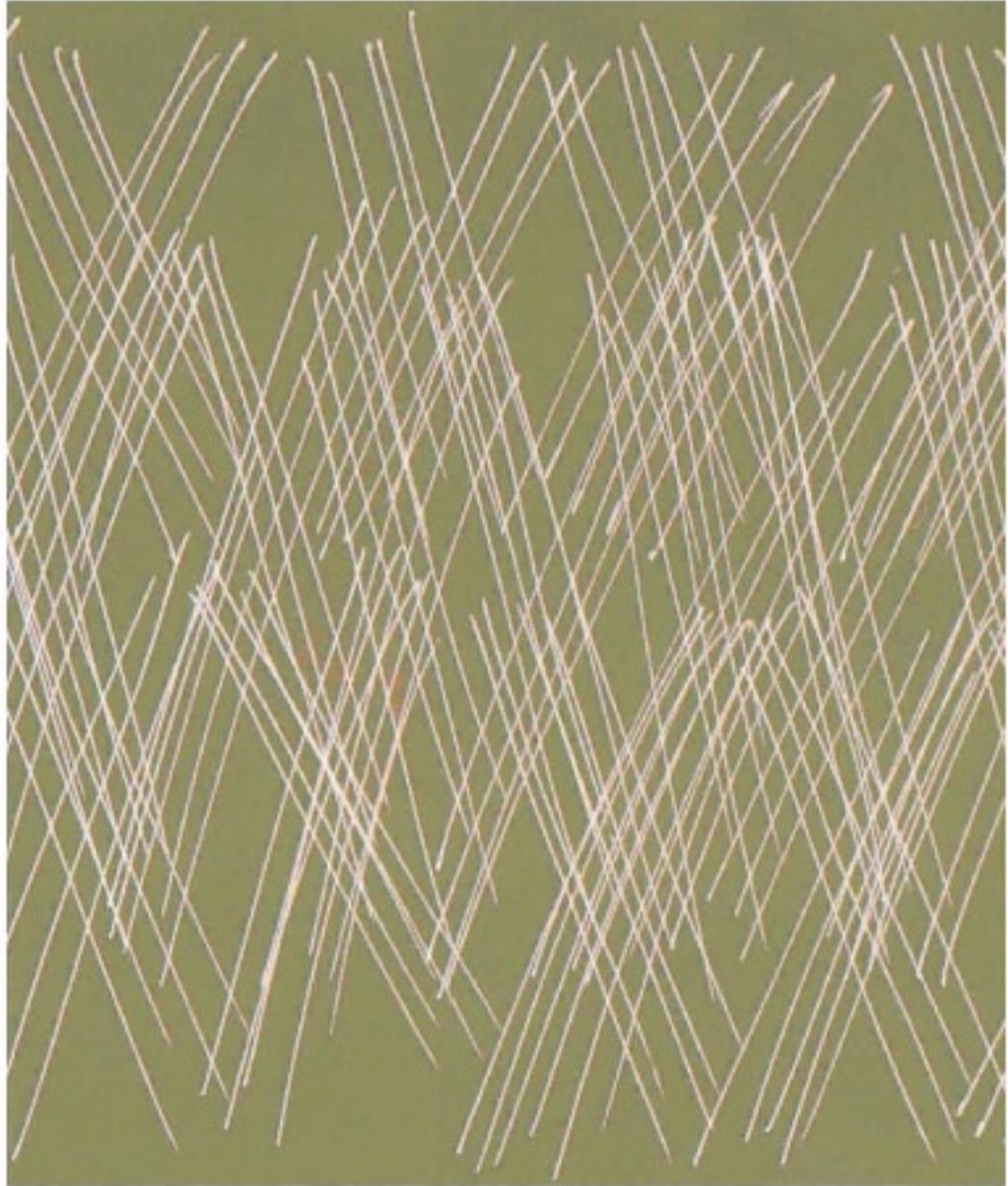
**Urban Occasion**

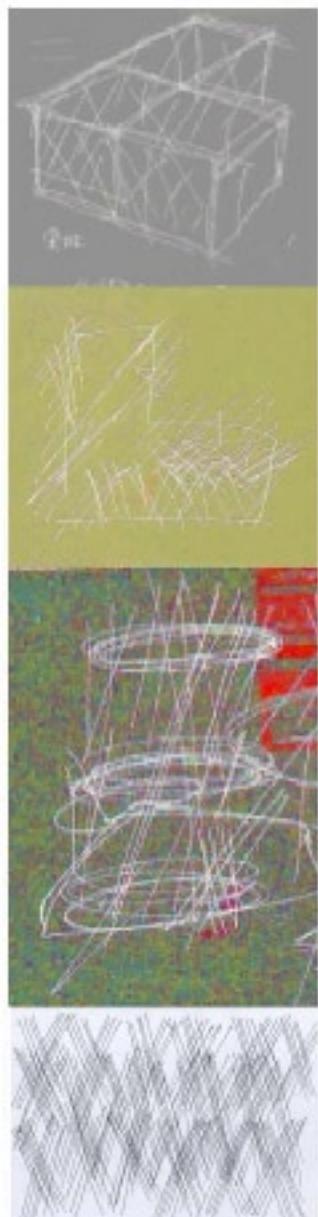
Oggetti per feste su disegni originali designed by Katsuya Komatsu.



Borilli et studi di Kazuyo Komoda per Tresgatti Mazzoni Gal.

Studies by Kazuyo Komoda for Tresgatti Mazzoni Gal.





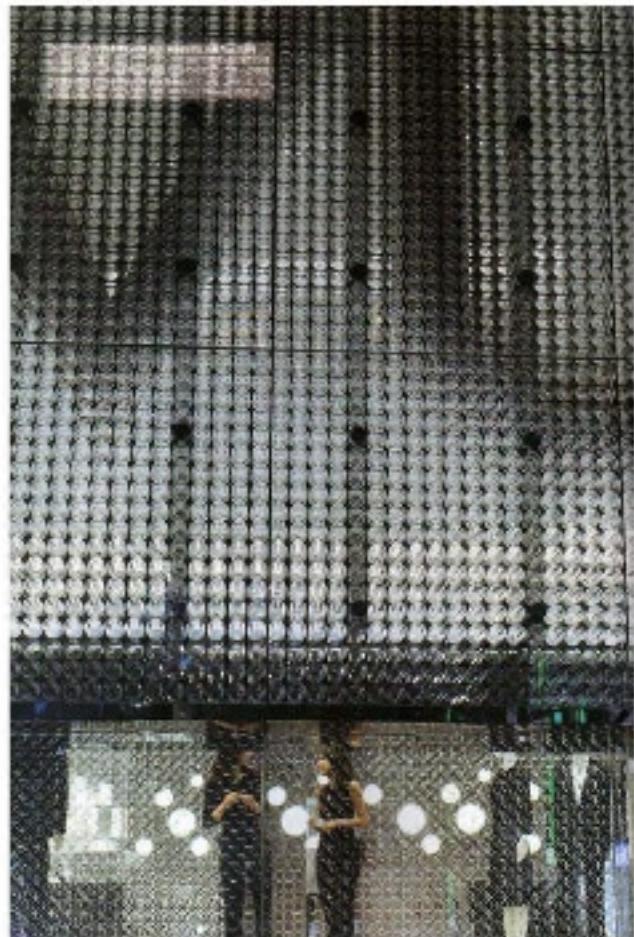
**E**xperiencing the home as a city, the city as a home.

Tessitura d'Asia is an exhibition space that becomes a mass of air thanks to its weave. A space that functions with just a few elements. A space without walls, without ceiling, only for display, but with a strong atmosphere and a translucent effect that is immediately completely perceptible, without having to focus on details. It's an installation idea designed to enhance products on display and stimulate the curiosity of visitors, inviting them to discover new things one at a time. At first glance the installation is homogeneous, almost a 'sensation' design, different from the traditional architectural approach, aimed at defining space through architectural elements – like walls and ceilings – and their mixture with symbolic and metaphorical elements.

In Tessitura d'Asia there are no dividers; the relationship between the display elements and the corridors is always the same, and the displays are composed of a few parallel planes arranged at different heights, diversified according to the type of products exhibited and the need to set them off or to provide a sense of physical and visual protection. The planes are structurally supported by slender metal tubes. With respect to usual display standards, these elements are much longer and higher, to involve the air. The very simple idea, in fact, is that of extending the structure and thus defining the entire space, giving it a thickness and a texture. To interpret the theme 'Urban Occasion: the home as a city, the city as a home' I thought of a space without thresholds, where outside and inside are closely related, but at the same time have a subtle bordering, expressing the sense of a balanced interpenetration of the public and private dimensions, between 'experiences' in the home and outside it, working or traveling. I thought of an environment that would suggest the idea of protection, would be welcoming and express transparency, trust, simplicity.

The reference I have borrowed for this project is the concept of the ciaphregm, i.e. of the 'grid' that acts as a filter between inside and outside, light and shadow, public and private. This concept belongs in particular to the Japanese culture of residential architecture. For this color I chose neutral white as the ideal 'container' for different product types. I then divided the products into three groups according to 'image temperature': 20 degrees – light spring-like colors, metallic, luminous, elegant (the most important part of the trend); 24 degrees – colors of balance, intense but not too eloquent, sober, with a solid image; 36 degrees – natural colors, leather, earth, etc., for more traditional objects. (Kazuya Kawada)

Abitazione Lavoro e Vacanza, Tokio



Ateliers Jean Nouvel, Residenza Condominiale les Gouttes de Pluie, Parigi, Francia 2008

Progetto Koseeda: Residenza Condominiale les Gouttes de Pluie (progetto 2008)



**P**roporre nello spazio di residenza una nuova idea di progettazione, alimentata nel tempo dall'importanza della sfida del comfort e del relax.

Living nell'pace erewildare il piacere non ha mai avuto come mai la importanza dell'esperienza di conforto e relax.

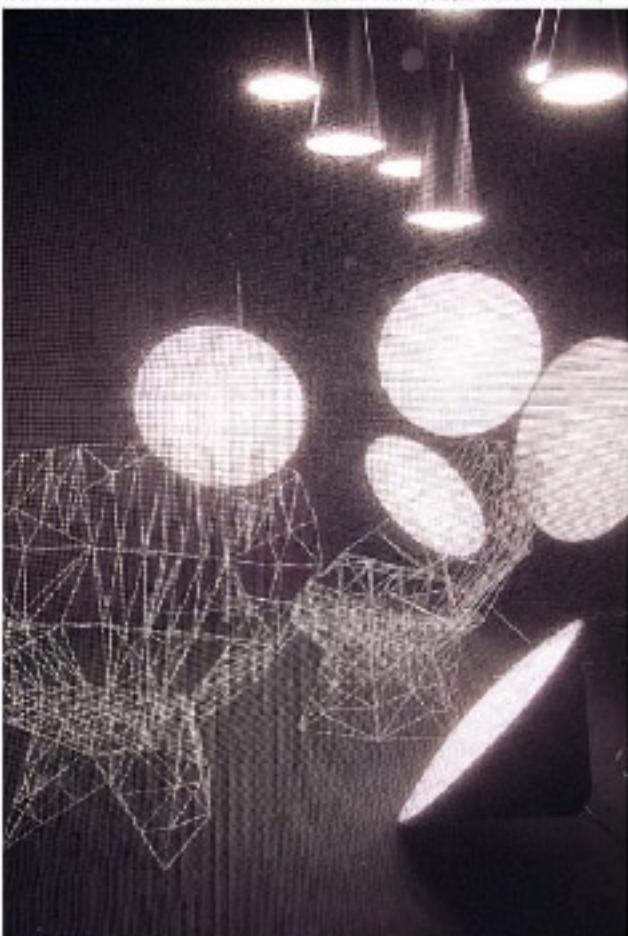


Kazuya Kusuda's "Pell-mell" (1990) is a mobile made of translucent plastic.



**L**aureato sui valori della trasparenza, fiducia, semplicità, dimostrando la capacità di trovare soluzioni "sage e intelligenti" ai problemi della vita pratica.  
Working on values of transparency, trust, simplicity,  
demonstrating the capacity to find "wise and intelligent"  
solutions to the practical problems of life.

Toshiyuki Kita's "Light Web" (1990) is a mobile made of translucent plastic.





**C**ollegare il mondo della funzione e il mondo della occasione, proponendo oggetti che siano espressione di ritualità quotidiana consueta e di nuovi stimoli visuali.  
Connecting the world of function with the world of occasion, proposing objects that are an expression of normal everyday rituals and new visual stimuli.



**G**entire la proposta espositiva sull'eleganza delle materie (primo tra tutti la ceramica), sulle qualità del confort, della durata nel tempo e sull'economicità.  
Focusing the display proposal on the elegance of the material (ceramic, above all), the quality of comfort, durability in time and economy.



# INTERNI

LA RIVISTA DELL'ARREDAMENTO N° 6 GIUGNO 2006

**ARCHITETTURE:  
CASE E NATURA**

**ATTUALITÀ:  
SHOPPING SPACES**

**MILANO FUORISALONE 2006:  
LA CITTÀ SI CONFRONTA  
CON LE AVANGUARDIE DEL DESIGN**

**SOBER DESIGN**  
by Piero Lissoni

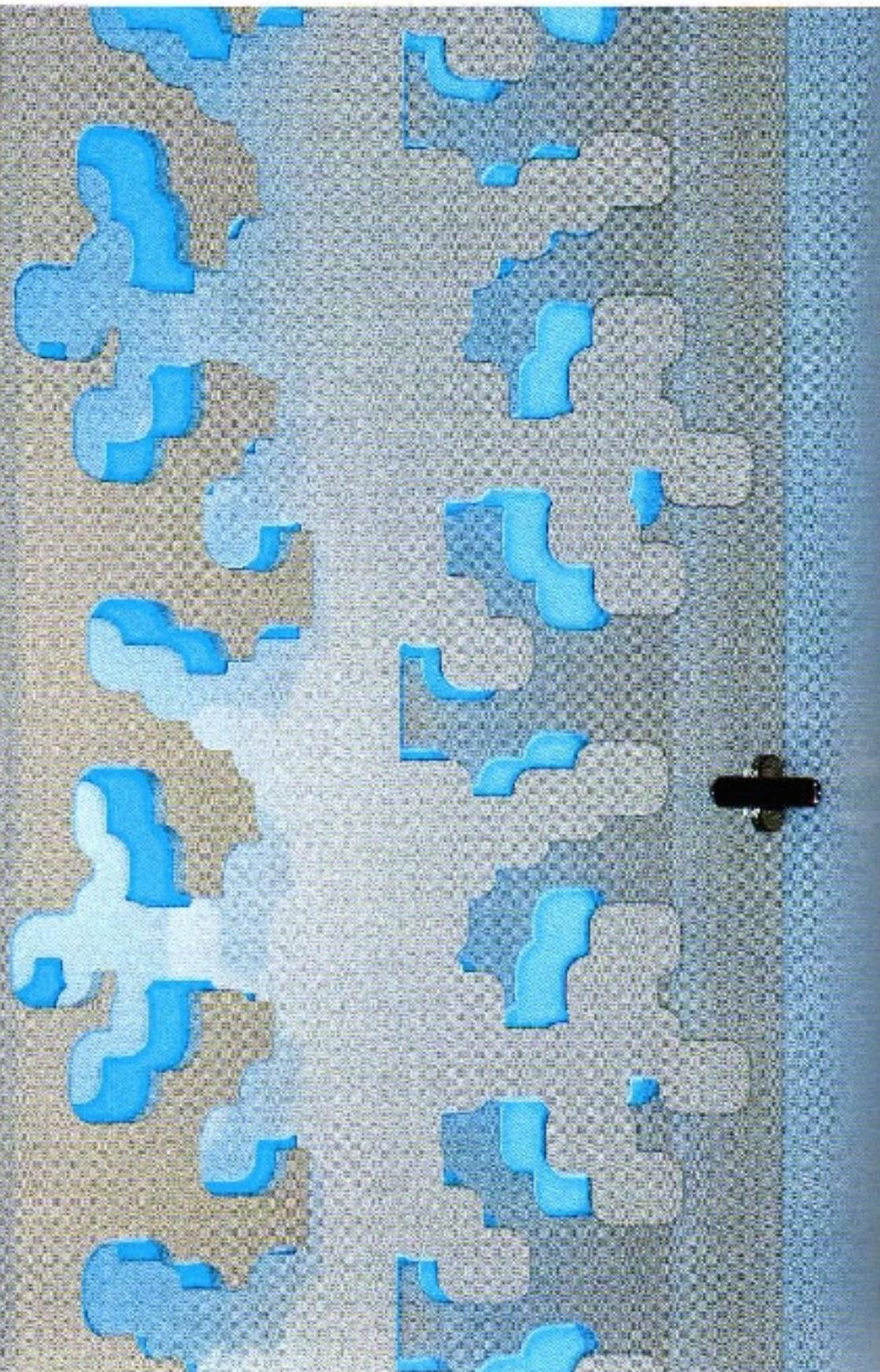


977122365001



Mosso Minguzzi porta con elemento centrale gravile "Sea Dock" in metallo e acciaio inox, design di Kazuyoshi Kondo per il nostro Ocean Your Land di Fimex, nuovo brand di arredo di Uffici, Corpiamobili e Open Space.

Nella pagina accanto, Superet, lo Plus: cascata di blocchi di polietilene modulare utilizzata per le pareti interne del Wood hotel romanesco. Progetto di Alessandro Di Stefano Food Design per la nostra Urbanity Green (cucine & Mobili da cucina) a cura di Claudio e Valerio Giammari.



# ITALIAN DESIGNERS BOOK

中小企業のデザイン戦略

1961年東京生まれ。

#### 生産／設計

慶應義塾大学、フロタウ・ザリイン社等、  
カライ義則、ジニアード・ザインス  
クジオを経て、1989年あせん・スタ  
シオリンタクアノに就職の後、フリ  
ーランスとして活動。

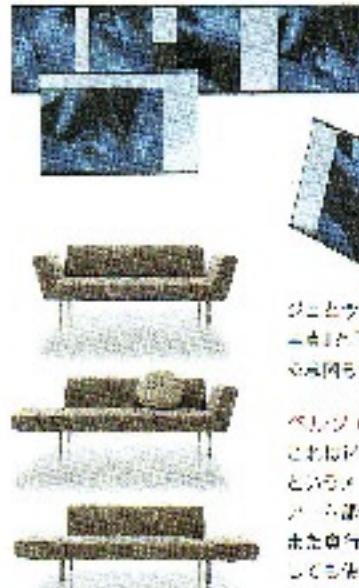
当時主にアリア、アントニオ  
イシダーノ・ショル、P.L.マラッタ  
等のヨーロッパの一流会社のプロ  
ダクトやキンテガディーニ・カルメ  
のペルベテーン・ホタル、ノライ・  
フィード・ディセーク等のインテリア  
デザインを担当。

#### 日本での活動歴

1990年日本クリエイティブ  
カガミクリスカル社  
1991年 ディ・カーラ  
（ワールド社）  
1992年 リンクデザイン  
(Promotion)  
1993年 フィード  
カラーリング・センサル・シント  
(アマハ・新潟県デザイン部門)

#### 使用言語／

英語、イタリア語、日本語



**デーリア (Deli)**  
シンプルな構造が特徴で、  
アルミニウム脚と木製の座面と背  
もたれ部分に一貫でシームレスな  
仕上げで、またカーブの形をこ  
そりすく形でいる。椅子  
の背面は多く用いられる  
斜面の形をしており、マー  
クシカウド的な内装で素材の温かみが「温玉チ  
ーク」として表されています。この商品は日本でも  
人気がある。(2005年/トリノ社)

#### ペリオ (Perio)

これはP.Medina（ペトロ・アントニオ・マリヤー）  
とのコラボで、このための「ペリオ」というソファ。  
アルミニウム脚が直線で、大きく曲がる形となる。  
また背もたれが70センチ幅の背もたれと  
しても使用可能。

(2005年/イタリアトヨマリヤー社)



#### スミ (Smile)

お部屋入り、公園には、2005年にデリコンした  
ものと同じ色の籠式ベンチとして、一方  
では屋上で花を育てる花壇として、その他のトリ  
アルに、オーバルの座面がより利用となる。  
自分で生活のための出で歩き入出でする花壇が  
発売されヒット商品となっている。  
(1997年/トリノ社)



## Komoda Kazuyoshi

### Kazuyoshi Komoda Design Studio

Address Via Benedetto Marcelli 44 20121 Milano

Tel +39 02 66713655 Fax +39 02 66713655

e-mail kazuyoskomodadesign@fastwebnet.it URL www.kazuyoskomodo.com

自分のプロダクトデザイン、インテリアデザイン、インストレーション、キューレートといった、  
幅広い分野の中で私が最も興味があるのは、物や環境の非物質的な侧面や  
物や環境が人に心理的に与える影響にある。  
それこそが形や機能以上に、人の生活に深い影響を与えると考えるから。  
だから常に、物の新しいあり方を探求していくことを考えていく。



#### カルマ (Karma)

ドイツのDortmunder U  
ーングマッカの外観を基  
にした、正統の伝統の  
线条を基とし、レベルで  
ついでいくのに似せて、  
この半島の形状をハイ  
ブリックを組んでラン  
ーの形状に似せていて  
、右の上に似た形に  
カーブが45度の向きに  
なり、カーブしカーブ  
して費用出来る。(2003  
年/トリノ・ラーフ社)



#### アジサイ (Rose)

アルミニウムインクーナショ  
ナル外のそのままの形で2005  
年、ペトロ・マリヤーの新規  
モデルのペトロ・マリヤーの  
アルミニウム脚とその他の  
形状のアルミニウム脚を採用  
して作成したものである。  
アルミニウム脚は高品質の  
アルミニウムを充てた  
もので、 Young & Rubicam 1995  
年的大賞、B&E賞受賞。  
(1998年/アキュレレス・イ  
ンターナショナル)



#### ベネチア・シリーズ (Benevello Series)

アーチ型の脚と低めの座面で、もたげ、もたげ、フランジ  
フレームの日本製。15,000円/カガミクリスカル社



#### フィード・ティ・セーフ (Feed Tie Safe)

ソファ・ソファ・ソファのブ  
アイク・シングルアーム、簡単  
のアルブローネ、レシーブ  
スペース、歌歩廊道で歩ける  
音響スペース、居住性のない  
心地よいソファスペースと  
構成されていて、非常に  
実用的である。

カガミクリスカルのモダンな  
ソファは、内装のモダンな空間と  
外観のアーティスティックな空間との  
調和を追求している。 (2005年/ラーフ社)

numero consonanze

# ACTIVA



h u m a n i a c t o r s

## TRA DESIGN E POESIA, PROGETTI RECENTI DI KAZUO KOMODA

In questo suo design è passato il tempo degli obiettivi di Kazuo Komoda, ora disegnare è appassione, che si nutre verso il futuro. Komoda ha il talento di scegliere soluzioni che contengono elementi di estetica poetica, che nasce poi a seconda dei suoi progetti, opposti e in contrasto, come la concezione di un'utopistica società, leggera e a volte ironica, che ammette le poesie, le riflessioni su tutte, sognando, so ridendo. Con estroversione, le sue cose rendono i gesti quotidiani più poetici... E magari, nella quiete, rivelano un senso di poesia proprio del nostro vivere quotidiano, che esiste: soprattutto perché fotografate come



PHOTO: EVO CORRA'

L'OPERA DI KAZUO KOMODA

68



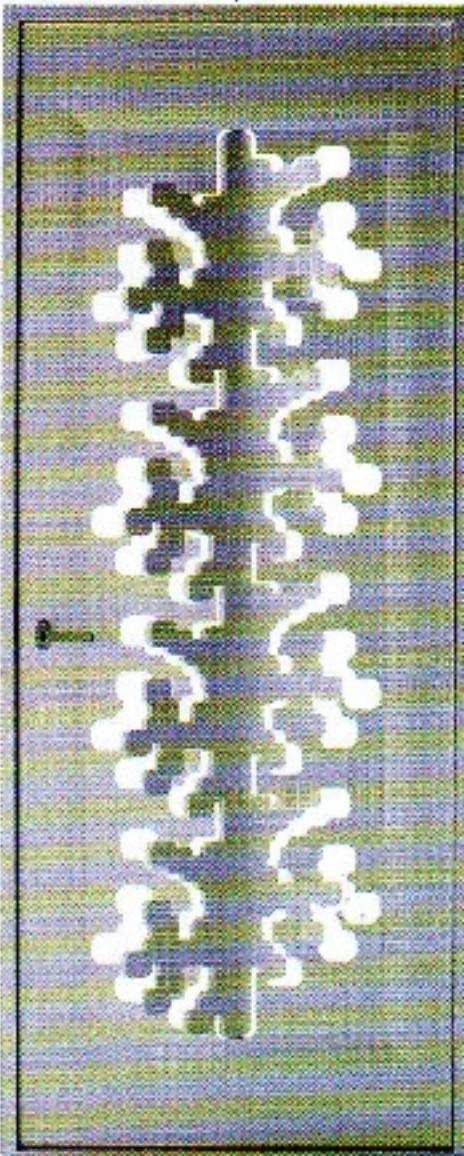
Ecco  
scenarie di pol-  
teri, di misteri, di umore,  
espresso in un modo poetico.  
Collezione "Lumineggi", che racco-  
glie momenti trascrittori del tutto  
l'ambiente, visioni circolari, le tracce  
nebulose dello spettatore, i veluti mura  
fioriti e fioriti misteriosi, i palloni di ghiaccio  
che, illuminati e liberi nel cielo,  
proiettano sulle pareti i riflessi del mulino  
sviluppato a una velocità record. Il miscelato  
dell'aria, un'insegna assurda, rende  
possibile questo spettacolo, i personaggi retti dal  
potere di ruota, sono riportati in un lato del  
specchio come adorati, scatti che raccontano il  
maggioraggio di luci proiettando così sulle  
pareti l'immagine realistica della realtà. Ma  
lo spazio non è solo un luogo d'attrazione,  
quando si scopre che è double face,  
il progetto torna allo stato pur  
essendo il risultato del quotidiano.  
Incontro, Kazuo ci risponde  
che è un'esperienza geniale.

www.komoda.com

IN QUESTE PAGINE E DI AVANTAGE: USSEZIONE DEL PALAZZO  
FERRARIO, PROGETTO TERRA-ARTE CONCEZIONE KAZUO KOMODA  
E IL GLOBO FLUTTO COLLE ZORRINI, QUALE RICCHEZZA DELL'  
ARTE, SOSPETTO E MISTERIO DEL MUNDO DI MUSICA,  
CONCEZIONE KAZUO KOMODA. LE LUCI DELL'ARTE E DEL  
MISTERO, QUELLA DELLA LUCE DIVINA DEL PALAZZO E  
GARIBOLDI IN CIELO ABBIANO. È UN'ESPRESSO DI LUCE  
E SILENZIO, IN SOLENTE PER FESTEGGIARE IL NATALE.

PHOTO: EVO CORRA'

Anche "Lace door" è un progetto duplice, che gioca sui concetti di chiusura e apertura, scherzando col paradosso: da una parte ci si aspetta, solitamente, che sia chiusa o aperta, che definisca il limite tra dentro e fuori. Kuzuyo, invece, dà voce all'estigenza ambivalente di lasciar passare la luce e far vedere oltre e attraverso una porta chiusa. Essenziale, quindi, la sottile ricerca del 'vedo-non ve-co': la curiosità di osservare attraverso un filtro. Komoda ritaglia, all'interno della porta, uno sogno girevole, che crea sorprendentemente diversi gradi di apertura, anche a porta chiusa, lasciando intravedere luce e passare aria. La sagoma appare ora come astrazione di un albero, di un fiocco di neve ripetuto, di un pixel, a seconda di chi osserva. "Ho pensato di dare più funzione ed espressione a questo elemento di comunicazione tra i due ambienti - precisa Komoda - cercando anche il divertimento", e rubando l'immagine semitrasparente del pizza che, stilizzato in abili contemporanei, dà significativamente il nome alla porta.

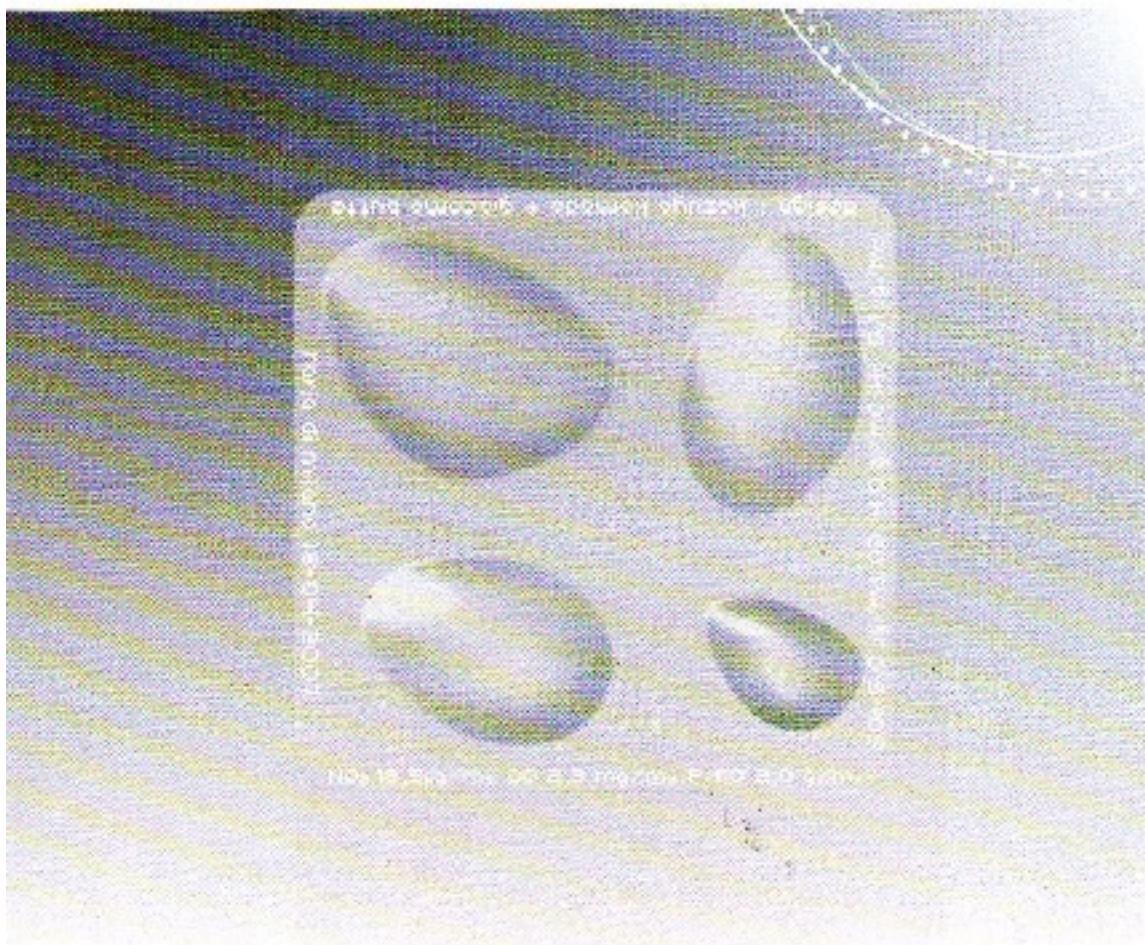


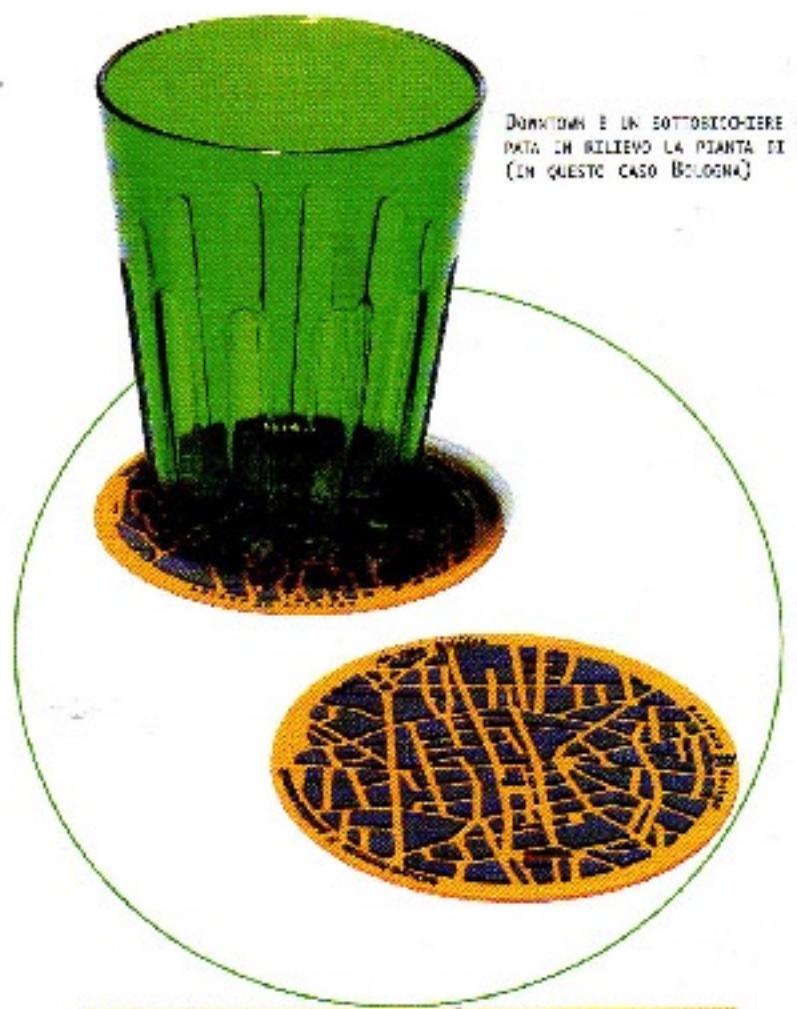
Lace Door (foto: Tizio) è una porta costituita da un elemento centrale circolare, che crea diverse soluzioni di apertura, oltre a un design estremamente ricco, consente di individuare i locali e controllare la quantità di luce nello ambiente. Qui il design è una sorta di filo di ferro... e la luce che traspone è lui.

Nella foto in alto: L'Arca di Noè. Vede che porta una di un bello (un pugile e un pugnese), sul quale sono indicate le dimensioni e i suoi commenti (diametro, ampiezza canile, peso, ecc.). Il porto di Agosto per "Passeggi connessi di Milano", è fatto di un mosaico di legno e cuoio (metà della e in modo "sorprendente") non è convenzionale (1).

"Aria di Milano" è un lavoro concettuale, emblematico dell'opera recente di Kazuyo Komoda, che ha ormai raggiunto un livello di maturità professionale consolidato. "La prima cosa che mi ricordo di un luogo - rivelà Kazuyo - prima ancora dei monumenti, è l'aria": da questa esperienza personale nasce l'idea del progetto, che si sviluppa poi in collaborazione con Giacomo Butté diventando un pungente, geniale 'souvenir di città': al posto del Duomo o della Madonnina l'icône di Milano è l'aria stessa, tristemente famosa per le polveri sottili, che soffocano ogni giorno i suoi abitanti: aria impalpabile qui racchiusa in un blister per farmaci, che riporta precisamente la composizione chimica e le quantità dei suoi componenti, come ogni medicina che si rispetti.

Senza alcun moralismo ambientalista, ma con molta mordace intelligenza Aria di Milano diverte e fa riflettere, lanciando un segnale d'allarme serio dal mondo del design, troppo spesso assente e disinvolto di fronte alla realtà.





DOWNTOWN È UN SOTTOBICCHIERE CON STAMPATA IN RILIEVO LA PIANTA DI UNA CITTÀ (IN QUESTO CASO BOLOGNA)

Altro progetto sul tema di città, altro souvenir: che cosa, più di una mappa, condensa la quintessenza di una città? Non è forse guardando la pianta di Berlino, New York, Parigi, Tokyo, Lisbona - che prendono forma i sogni di viaggio, la voglia di partire, la curiosità di immaginare un luogo? Dev'essersi ispirata a queste suggestioni Kazuyo Komoda, nel progettare "Downlawn", un sottobicchiere prodotto da Pandora Design con impressa, per microiniezione di resina siliconica, la pianta di Bologna: dischetto circolare che il barista fa scivolare sul tavolo prima di posare l'aperitivo e che ricompare ogni volta che solleviamo il bicchiere. Perfetto souvenir metropolitano, da collezionare città dopo città, bicchiere dopo bicchiere...

Il progetto per un gioiello di lusso "Tamate", presentato in occasione di Luxury Design per il Salone del Mobile 2007, diventa l'occasione per dare una rilettura tolta del lusso. Il gioiello è pensato "non come oggetto che ostenta - spiega Komoda - ma come oggetto nobile e raro": estraibile solo in determinate, speciali circostanze.

La pietra preziosa del monile è nascosta, non si mostra: custodita e racchiusa da due piccole ali ricurve e sovrapposte. Chiuso, il gioiello è una semplicissima placca rettangolare in oro bianco, appesa al collo. Dischiuso, le ali laterali si allungano e lasciano apparire una stupefacente e ricercata composizione di piccoli diamanti e madreperla.

Tamate - un gioco di parole in giapponese ricamato attorno agli ideogrammi di 'scatola porta gioielli' - è di fatto un gioiello che contiene se stesso, mostrandosi come guscio e contenitore.

Ma Tamate diventa anche la metafora spirituale dell'anima, contenuta nell'involucro del corpo, da rivelare solo in rare occasioni. Con questo gioiello, che brilla di luce propria, Kazuyo Komoda fa una sapiente lezione di stile, ricordando che un oggetto non dovrebbe essere solo esibito, ma portato e posseduto per il significato profondo che contiene.

IL PROGETTO TAMATE PRESENTATO QUEST'ANNO IN OCCASIONE DI LUXURY DESIGN

Un progetto dopo l'altro, Kazuyo Komoda instaura un dialogo ora leggero, ora profondo tra persona e cosa, in un percorso ricco di diversi livelli di lettura, stratificati. Spesso ambivalenti i suoi progetti scavano l'altro lato delle cose, scardinando la funzione primaria e più scontata di un oggetto, per svelarne, magicamente, un'altra: emozionale, sensibile. E' questo, il 'design poetico' di Kazuyo, che non ha proprio nulla a che vedere con il design di tendenza che ogni stagione popola di nuove, effimere forme gli scaffali dei negozi. E' un'altra categoria dello spirito, dove la continuità nel tempo degli oggetti è garantita dalla loro intrinseca qualità, prima di tutto, ma anche dai valori intramontabili e senza tempo che certe cose rappresentano.

Non è un caso che il suo lavoro di designer incroci sentieri diversi che sconfinano nell'arte e nella poesia, attingendo alla semantica delle cose e suggerendo spesso filosofiche riflessioni, e tuttavia lo spessore intellettuale dei suoi progetti non arriva mai ad appesantire la materia di cui sono fatti. Che resta leggera e trasparente.